

## 平成二十五年度年史企画展

# 「関西大学の秀麗たち―女子学生ものがたり―」の記録

## 年史編纂室

大正十一年（一九二二）六月五日、本学は大学令に基づく大学への昇格を果たした。山岡順太郎総理事を筆頭に、本学首脳陣は「学の実化」講座をはじめとする新たな取り組みを次々と展開した。そして翌大正十二年（一九二三）には、女性の参加を認める夏期語学講習会を開催するとともに、女子学生にも大学の門戸を開いた。制度的には聴講生もしくは選科生という立場であったが、その先陣を切って一人の女子学生、北村兼子が入学してきた。北村の入学から九十年となる平成二十五年（二〇

一三）、本学は一万人以上の女子学生を擁する日本でも有数の大学となっている。

こうしたことを踏まえ、平成二十五年度の年史企画展

は、黎明期の女子学生や新制大学に転換したころの女子学生、さらにはバブル期を経て現在に至るまで、九十年に及ぶ関西大学の女子学生たちの歴史に焦点を当て、「関西大学の秀麗たち―女子学生ものがたり」として開催することにした。

### 一 壁面解説パネル

企画展示室には、現物資料を展示するための大型ケーシングと、写真パネル用の展示台二基が設けられている。さらに、壁面を利用して数点の解説パネルが掲げられるようになっている。

今回の企画展では、順路に従い、最初に「ごあいさつ」のパネル、その横に大型パネルを掲げ、さらに大型展示ケースの左右に中型のパネル二枚を設置した。

「ごあいさつ」

「ごあいさつ」の文面は次のとおりである（パネル本文は横書き）。

年史資料展示室では、平成25年度の企画展として「関西大学の秀麗たち—女子学生ものがたり—」を開催いたします。

本学で初めて女子学生を迎えたのは大正12年（1923）のことでした。平成25年（2013）は、それから数えてちょうど90年になります。

大正末から昭和初期にかけて、ごくわずか本学に存在した女子学生たちは、制度的には聴講生もしくは選科生という立場の人でした。しかし、この黎明期にごく少数存在した女子学生たちも、昭和10年過ぎには一旦姿を消してしまいます。



「ごあいさつ」のパネル

正式に女性の入学が認められるようになったのは戦後のことであり、急激に増えてくるのは大学紛争以後です。そして今や女子の在学生数は1万人を越す状況となりました。

今回の企画展では、大学昇格を契機にわずかだけ門戸が開かれた黎明期から、戦後の新制大学における正式な入学、さらには、その存在が当たり前となる現代

にいたるまでの女子学生の歴史や、彼女たちを取り巻く社会環境などに焦点をあてるとともに、スポーツや芸能その他、さまざまな分野で活躍する女子学生や女子校友などの姿も紹介いたします。

最後に、開催にあたってご協力をいただきました関係各位に深甚なる感謝の意を表します。

## 大型パネル

### 「関西大学の秀麗たち―女子学生ものがたり」

大型パネルには「関西大学の秀麗たち―女子学生ものがたり」というタイトルを付け、四つの項目に分けて写真と次のような解説文でそれぞれの時代の状況を概観した（パネル本文は横書き）。

### 女子学生受け入れの伏線となった語学講習会

大正7年（1918）、大学令の施行に伴い、国内の大学は次々と昇格していった。関西大学もその動きのなかで懸命の努力を重ね、大正11年（1922）6月5日に悲願であった大学昇格を果たした。新しい大学

の建設にあたって、ときの総理事山岡順太郎は、「学理と実際との調和」「国際的精神の涵養」「外国語学習の必要」「体育の奨励」の推進を提唱し、それを「学の実化（がくのじつげ）」の一語で集約した。

大学昇格に伴い、山岡を中心とする本学首脳陣は新たな取り組みを展開した。その一つに「学の実化」講座がある。この講座は、大学の講義では得られない実地的な知識を取り入れることを大きな目的としていた。そして、これ以外にも山岡の考えを反映して開催されたものの一つに「語学講習会（英語科、仏語科、独語科）」がある。

大正12年（1923）夏、学外の社会人を対象として開かれたこの講習会は「男女を問わず入会を許す。女子聴講者には特別席を設け、かつ数多きときは別に女子部を置く」として受講生を募ったため、昼間・夜間あわせて539名の受講申し込みがあり、そのうち女子聴講生は54名を数え、当時としては画期的な催しとなった。講習会終了後、フランス語を受講した女性の一人は「機会さへ与えられれば」と題する感想文の

最後でこう綴っている。

……切めて関西大学だけでも毎年出来ることな  
らもつと年度、そしてつと長期間妾達女子の為  
めに向上の道を啓いて頂きたいと存じます。尚ほ  
余りに無理な希望かも知れませんが、他の一般の  
学科の切めて傍聴だけでも許して頂ければ、妾達  
はどんなにか幸福でせう、又どんな努力でも厭は  
ないでせう。

大学が男子だけにしか開かれていなかった時代、向  
学心に燃える女性たちの願いは切実であった。

その後、「語学講習会」に続いて開催された「日曜自  
由講座」も女性に解放され、これらの講座への女性の  
積極的な参加は、「大学は男だけ」とする制度に再考を  
迫ることになった。このあと、複数の女性たちが聴講  
生、選科生として本学へ入学してくるが、それは、こ  
うした講座が伏線になったと言えよう。

【写真】 第1回夏期語学講習会参加者（大正12年）



大型パネル「関西大学の秀麗たち」

## 黎明期の女子関大生たち

今回大学ではいよいよ男女共学制を実施するところとしたところが、早速聴講生として一人の婦人がはいつて来た。我国でも既に一二の大学では、この男女共学制を実施してゐるが併し未だ物珍しがられてゐる。

これは大正12年（1923）10月、本学初の女子学生・北村兼子が入学してきたとき、『千里山学報』に掲載された記事の一部である。この時代、女性がたとえ聴講生としてでも、男性と一緒に大学で教育を受けるのが珍しいことであつたのがよく分かる。

しかし、この先駆者となつた北村のあとに続いた学部の女子聴講生はあまりにも少なく、多く見積もつても十指には満たない状態である。

また、学部だけでなく、夜間の専門部の女子学生第1号となつたのも北村であつた。このときは永井美枝も同時に入学しているので、この2人が専門部女子専科生の嚆矢となる。その後、記録上では7人ほどの女性が専門部で学んだとされているが、それも昭和の初

期でとだえてしまう。当時の社会では、「女に学歴などいらない」という意見が多数を占めており、働きながら夜、男子学生と同じ場所で学ぶことは、到底理解されるものではなかつた。

しかし、それだけに、夏期語学講習会や日曜自由講座、さらには聴講生、選科生という形で本学が男女共学制を実施したことは評価されるべきだろう。

【写真】独法科の例会に出席する北村兼子

## 戦後の女子学生たち

女性に大学の門が完全に開かれるようになるには、戦後まで待たなければならなかつた。

長い間女子の進学を阻んでいた制度上の壁を取り払つたのは、昭和20年（1945）12月に幣原内閣が決めた「女子教育刷新要綱」であつた。この要綱は、男女の教育機会均等をうたい、大学に対して女子の入学を阻む規定を改廃することや、大学予科に高等女学校卒業者の入学を認めることを求めた。

これにより、本学もすぐに学則を一部改正し、学部

の入学資格に高等女学校高等部、女子専門学校、女子師範学校の卒業者を加え、昭和21年度から実施した。その結果、この年、法学部に1名の女子学生が入学し、翌年には予科、専門部にも入学してきた。

しかし、初期の女子学生は数が少なかったため、多数の男子学生に混じって戸惑いや気苦労も多かったようである。反面「選ばれた」という自負心から向学心に燃えていた。「これからの女性は男性に頼らずに生きていく力を身につけるように」と家族に勧められたのを入学の動機としたという女性も少なくなかった。男女同権、女性自立への関心が高まっていたことがうかがえる。

ただ、大学内の設備は女子学生の受け入れには万全であったとは言えず、トイレの整備や休憩室の設置要求などが学生大会での決議として大学当局へ提出されたりもした。

この時期の女子学生は卒業後、就職関係をはじめ各分野で活躍した。そのうち、昭和29年（1954）に卒業した学生の一人は、翌年、本学の女性として初め

て司法試験に合格し、判事の道へ進んでいる。

【写真】 大学外苑で行われた女子学生と卒業生たちの親睦の集い（昭和27年4月）

#### 増加する女子学生たち

その後も女子入学者数は増え続けたが、全体に占める割合は小さかった。女子の学生数が急増してくるのは昭和40年代後半、大学紛争以後のことである。

そして現代。平成24年（2012）4月に刊行された「大学ランキング2013」（週間朝日ムック）によると、本学の女子学生数は10951人。日本国内で1万人を超える女子学生を擁する7大学のうち、日本大学（19897人）、早稲田大学（15186人）、立命館大学（11794人）について4番目に女子学生が多い大学となっている。男女の比率で見ると、立教大学（51・7%）、関西学院大学（45・7%）について第3位（39・3%）である。

かつて大学への要求項目にまだなかったトイレや休憩室は、今やパウダールームと呼ぶにふさわしい場所へ

と生まれ変わっている。キャンパスで見かける女子学生の笑顔は明るく、華やかである。毎年、25000人あまりの女子学生が社会へと羽ばたき、さまざまな分野で活躍している。黎明期、わずか10人ほどしか存在しなかった女子学生が、今や1万人を超え、在学生の3分の1あまりを占める状態になった。キャンパスも大きく様変わりしたのである。

【写真】元氣あふれるチアリーダー

### 中型パネル 「関西大学における卒業生数の推移」と

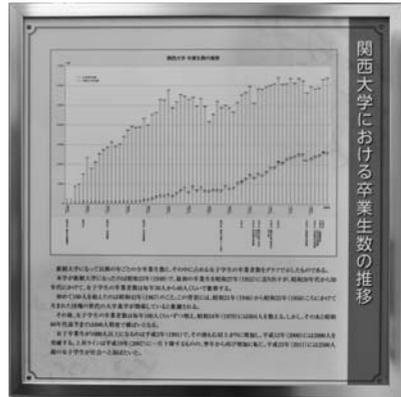
#### 「ファッション年表」

大型展示ケースの左右には「関西大学における卒業生数の推移」と「ファッション年表」、計二枚の中型パネルを設置した。

「関西大学における卒業生数の推移」の解説文は次のとおりである。パネルでは、解説文の上に男子学生と女子学生の卒業生数の推移を棒グラフと折れ線グラフで示した表を入れた（解説文は横書き）。



「ファッション年表」



「関西大学における卒業生数の推移」

中型パネル

新制大学になって以降の年ごとの全卒業生数と、その中に占める女子学生の卒業者数をグラフで示したものである。

本学が新制大学になったのは昭和23年（1948）で、最初の卒業生を昭和27年（1952）に送り出すが、昭和20年代から30年代にかけて、女子学生の卒業者数は毎年30人から40人くらいで推移する。

初めて1000人を超えたのは昭和42年（1967）のこと。この背景には、昭和21年（1946）から昭和25年（1950）ころにかけて生まれた団塊の世代の大学進学が関係していると推測される。

その後、女子学生の卒業者数は毎年1000人くらいずつ増え、昭和54年（1979）には804人を数える。しかし、そのあと昭和60年代前半までは600人程度で横ばいとなる。

女子卒業生が1000人以上になるのは平成3年（1991）で、その後も右肩上がりに増加し、平成12年（2000）には2000人を突破する。上昇ラインは平成19年（2007）に一旦下降するものの、翌

年から再び増加に転じ、平成23年（2011）には2500人超の女子学生が社会へと羽ばたいた。

もう一点の中型パネル「ファッション年表」は、1910代（大正初期）から2000年代初頭に至るまでのファッションの移り変わりを10年ごとの刻みで社会情勢とあわせて紹介したものである（本文は横書き）。

## 二 写真展示台のパネル

二基の写真展示台には、それぞれ四面ずつ、あわせて八面の写真パネルを掲出した。（写真解説は横書き）。

### 《写真パネル1 関西大学女子学生第1号 北村兼子》

本学に学んだ最初の女子学生は北村兼子である。大正12年（1923）10月、聴講生として入学し、千里山で男子学生たちに混じって授業を受けた。大正15年（1926）の学部卒業アルバムには北村の写真が数枚見られることから、聴講生ではあるが、学生間では同期生の一人として認められていたようである。



写真パネル1  
関西大学女子学生第1号北村兼子

在学中から朝日新聞の記者としても活躍。女性の地位向上をめざし、昭和3年（1928）にハワイの Honolulu で開かれた汎太平洋婦人会議や、翌年4月にドイツ・ベルリンで開催された万国婦人会議に日本代表として出席している。

惜しくも昭和6年（1931）7月に27歳の短い生涯を閉じたが、立川の日本飛行学校でパイロットの資格も得ており、生きていれば同年8月にヨーロッパへと飛び立つはずであった。北村の活躍ぶりは、当時の活動的な女性の中でもずばぬけていた。

写真1 卒業アルバムに掲載された北村兼子



写真パネル2  
黎明期の女子学生

写真2 北村兼子の受講風景  
写真3 卒業生記念写真（右端に立つ北村兼子）  
写真4 北村兼子の聴講修了証書  
写真5 ベルリンの国際婦人会議に出席する北村兼子  
写真6 パイロット服姿の北村兼子

《写真パネル2 黎明期の女子学生》  
本学が女性に門戸を開く伏線となったのは、大正12年（1923）夏に開催された「語学講習会（英語科、仏語科、独語科）」や「日曜自由講座」であった。これらの講座は、受講資格に男女を問わなかったため、女

性の積極的な参加があり、結果的に男女共学を認める契機となった。

学部（昼間）の聴講生第1号は北村兼子であるが、大正13年（1924）4月に専門部（夜間）の女子学生第1号となったのも北村である（このときは永井美枝も入学している）。その後、昭和2年（1927）には伊藤アヤと小西千代寿の入学も続いた。伊藤と小西の入学は、「関大の学窓に咲いた名花二輪」と題して新聞に取り上げられるほどのニュースとなった。

経済的な理由などで高等女学校へ進学できなかった女子学生が、働きながら夜間の専門部に入学したことは大きな意味を持つ。しかし、これらの聴講生（学部）や選科生（専門部）は特別扱いの存在で、正式な入学は認められず、所定の学課を修めても、正規卒業のよいうな資格や特典は与えられなかった。そこには資格を求めないひたむきな向学心だけが存在したのである。

写真1 男性に混じって和服姿の女性が目立つ第1

回夏期語学講習会の受講生たち（大正12年）

写真2 「関大の学窓に咲いた名花二輪」の新聞記事

写真3 伊藤アヤの修了証書

《写真パネル3 新制大学初期の女子学生》

本学で正式に女子学生の入学が認められたのは戦後になってからである。

昭和20年（1945）12月、「女子教育刷新要綱」で大学の男女共学が決定されると、本学も直ちに女性に門戸を開き、翌年、初めて女子学生が一人、法学部に入学してきた。

昭和22年（1947）には予科、専門部でも女子の入学が続いたが、戦後の混乱期ということもあって、その後の増加の幅は小さかった。昭和31年（1956）の経済白書に書かれた「もはや戦後ではない」という言葉は流行語にもなったが、その前年の3月時点でも女子学生数は1部、2部あわせて125名と、全学生の1パーセント強にしか過ぎなかった。

写真1 昭和25年の卒業アルバムに掲載された女子

学生部と男子学生部の部員たち

写真2 昭和20年代の女子学生たち



写真パネル3  
新制大学初期の女子学生



写真パネル4  
学園紛争からオイルショック  
にかけての女子学生

写真3 昭和26年10月の学園祭に集まった専門部の  
女子学生と卒業生たち

写真4 女子学生と卒業生たちの親睦の集い（昭和  
27年4月）

《写真パネル4

学園紛争からオイルショックにかけての女子学生》

年史編纂室の蔵書の1冊に『大学シリーズ 関西大  
学』（昭和47年10月、毎日新聞社発行）という本があり、  
当時のキャンパスの情景写真が多数掲載されている。

昭和47年（1972）と言えば、昭和44年（1969

9）に吹き荒れた学園紛争の嵐が一段落して大学改革  
が進められているときであり、昭和48年（1973）  
にオイルショックで日本中が大騒ぎになる前の年であ  
る。文学部や社会学部などで女子学生の数が増えたこ  
とから、キャンパス全体に華やかさが増してきた時期  
でもある。

ファッションの世界では、学生運動とともに普及し  
始めたTシャツとジーンズが定着する一方、ミニスカ  
ートがやはり、流行のファッションでキャンパスを行  
き交う女子学生の姿が目立った。

写真1 流行のミニスカートでキャンパスを歩く女

子学生

写真2 男性が占めていた工学部土木工学科にも女子学生が進出

写真3 第1学舎の中庭を歩くジーンズとミニスカートの子学生

写真4 女子学生の姿が目立つようになる昭和40年代後半

写真5 キャンプファイアーを囲んでフォークダンスを踊る文学部の新入生たち

### 《写真パネル5 バブル時代の女子学生》

昭和61年（1986）12月から平成3年（1991）2月までの51カ月間、日本では資産価格の上昇と好景気に見舞われた。俗に言う「バブル景気」である。

バブル期には地価や住宅の高騰、消費ブームの過熱など、さまざまな社会現象が起こった。「DC（デザインーズ&キャラクター）ブランド」や「ワンレン・ボデイコン（ワンレングス・ボデイコンシヤス）」と呼ばれるファッションに身を包み、高級ブランドのバッグ

などを持った若者が闊歩したのもこの時代であった。

このパネルに掲げたのは、平成元年の卒業アルバムに収められた写真である。ストレートの髪でフロントから後ろまで同じ長さの真直ぐ切り揃えたワンレングスの女子学生が散見されるが、彼女たちは流行に敏感であるとともに、取り入れるのも上手であった。

写真1・2 平成元年の卒業アルバムに掲載された「今どきの女子大生」

写真3 キャンパス風景（平成元年）

### 《写真パネル6 活躍する女子アスリートたち》

「強い関西大学」のスローガンのもと、近年は女子アスリートたちの活躍がめだつ。

平成24年（2012）を中心とした最近の戦績を一例とすると、フィギュアスケートでは、高橋大輔、織田信成、町田樹らの男子選手とともに女子も好成績を残し、第84回日本学生氷上競技選手権大会フィギュア部門Aクラス女子シングルで村元小月選手が優勝した。拳法部の女子は、団体戦で第56回と第57回の全日本



写真パネル5  
バブル時代の女子学生

学生拳法選手権大会を連覇するとともに、鈴木侑帆選手が第25回全日本拳法女子個人選手権大会で優勝した。

さらに射撃部の女子も第8回日本学生選抜ライフル射撃選手権大会で総合団体優勝した。

空手道部では、清水希容選手が第56回全日本学生空手道選手権大会と第8回世界大学空手道選手権大会の女子個人形の部で優勝している。

また、重量挙げでは山本優子選手（第13回全日本大対抗女子選手権大会）、尾崎都加選手（第24回全日本女子学生ウエイトリフティング選手権大会）、井上聡美



写真パネル6  
活躍する女子アスリートたち

選手（第9回全日本学生ウエイトリフティング選抜大会）、柏木悠里選手（第4回全日本女子選抜ウエイトリフティング選手権大会）が、それぞれ全国大会での優勝を果たしている。

しかし、これらの戦績はごく一部であり、栄光の記録は今後も積み重なっていく。

写真1 第84回日本学生氷上競技選手権大会で優勝した村元小月選手

写真2 第57回全日本学生拳法選手権大会の女子団体戦で連覇した拳法部の女子選手たち

写真3 第8回日本学生選抜ライフル射撃選手権大

会で総合優勝した女子選手たち

写真4 第56回全日本学生空手道選手権大会と第8

回世界大学空手道選手権大会の女子個人形  
の部で優勝した清水希容選手

写真5 第24回全日本女子学生ウエイトリフティン

グ選手権大会で優勝した尾崎都加選手

### 《写真パネル7 現代の女子学生》

現在、日本の大学のうち、1万人を超える女子学生を擁する大学は全部で7大学。そのうち、女子学生数で言うと関西大学は日本大学、早稲田大学、立命館大学について4番目に多く、男女の比率で見ると立教大学、関西学院大学について3位となる。

かつて、「バンカラ」で硬派のイメージが強かった本学は、今や女性の多い華やかな大学へと変身した。明るく近代的なキャンパスは、今後も女子学生によって大きく変化していくだろう。

写真1 学園祭の笑顔（平成23年）

写真2 華やかな卒業式（平成24年3月）

写真3 はじける笑顔の卒業式（平成24年3月）

### 《写真パネル8 卒業生数から見た女子学生の推移》

大正末、女子学生の入学に門戸を開いた本学には、学部、専門部あわせて十数名の女子学生たちが入学してきたが、昭和の初期には絶えてしまった。女性が大学で勉強を続けることの大変さは、現代とは比べものにならなかった。

戦後、教育制度が改正され、女性の大学入学が正式に認められるようになったが、それでも昭和20年代、女子大学生の存在は珍しかった。昭和23年（1948）に新制大学がスタートし、初めての卒業生が誕生した昭和27年（1952）の女子卒業生数は19名であった。その後、昭和30年代は毎年、30人から40人くらいの女性が本学を巣立っている。

女子卒業生数が1000人を超えたのは昭和42年（1967）で、1119名であった。昭和45年（1970）には288人、翌昭和46年（1971）は355人、昭和48年（1973）403人、昭和51年（1976）



写真パネル7  
現代の女子学生



写真パネル8  
卒業生数から見た女子学生の推移

628人となり、昭和50年代は毎年6000人前後の女子学生が卒業している。

10000人を超える女子卒業生が出たのは平成3年（1991）で（1057名）、9年後の平成12年（2000）には2054名と、2000人を突破した。そして平成23年（2011）には2542名を数え、4学年あわせると女子の在学生数が1万人を超えるようになったのである。

写真1 中央公会堂小集会室での北村兼子（右列前から3人目、大正12年11月17日）

写真2 女子学生と卒業生たちの親睦の集い（昭和

27年4月）

写真3 ギターを持って大学前通りを歩くミニスカ

ートの女子学生（昭和47年ころ）

写真4 着物姿の女子学生が目立つ卒業式（平成24年3月）

### 三 現物展示

大型展示ケースの中には、大型パネルの解説に沿った形で、大正末から現代にかけての現物資料を展示した。

展示品は大きく三つのグループに分けられる。一つは本学最初の女子学生である北村兼子に関する資料。二つ

めは矢井田瞳やbird、西加奈子といった芸能界や文学界で活躍する女性の卒業生に関する資料。三つめは本学出身の女性アスリートに関する資料である。それぞれの展示品に対する解説文は次のとおり（記述は横書き）。

「評論随筆年鑑」

評論随筆家協会が昭和6年（1931）2月5日に発行した「評論随筆年鑑」。前年に発表した作品を著者ごとにまとめている。北村兼子は昭和5年（1930）に28本の作品を発表していることが分かる。同じページには齋藤茂吉の名も見える。巻頭の「昭和五年評論随筆界概観」中、「関西に於ける評論・随筆」の所で「……個人の述作に就ては……特殊のものを二三摘記すると……北村兼子の多方面への進出など、それぞれ昭和五年度の関西文壇を彩るものであった」と特筆されている。

提供…山野博史関西大学法学部教授

「怪貞操」

昭和2年（1927）2月5日、改善社刊。北村兼子5冊目の著書。女性に対する性的いやがらせや低俗紙のでっち上げ記事と鋭く対抗した女性の人権擁護の書であると同時に、「男子専制」社会の欠陥を衝いて、反戦・平和主義を宣言した名著である。

「表皮は動く」

昭和5年（1930）2月1日、平凡社刊。北村兼子10冊目の著書。昭和4年（1929）6月、ドイツのベルリンで開催された第11回万国婦人参政権大会に日本代表として出席したあと、北村はパリで画家の藤田嗣治（レオナルド藤田）と親しくつきあった。この本の装丁には藤田の絵が使われている。

CD 「daiyamonde」

矢井田 瞳の1stアルバム（平成12年10月25日発売）。言葉遊びや回文、アナグラム好きなヤイコの性格を反映して「daiya」＝ヤイコの逆読み＋「monde」＝フラン



現物展示の様子

ス語で世界の意味が込められている。

#### 矢井田 瞳と鳥越俊太郎の色紙

平成16年(2004)6月2日、テレビ番組「僕らの音楽隊」のロケが千里山キャンパスで行われ、鳥越俊太郎氏(ジャーナリスト、当時本学社会学部教授)と対談したときに残したものだ。

#### 西 加奈子の著書

小説家。関西大学法学部卒業。平成16年(2004)、『あおい』でデビュー。平成17年(2005)、『さくら』が20万部を超えるベストセラーとなる。平成19年(2007)、『通天閣』で織田作之助賞受賞。平成18年(2006)に発売された3作目の小説『きらいゾウ』は宮崎あおいと向井理主演で映画化、平成25年(2013)に公開された。また、平成24年(2012)8月に刊行された『ふくわらい』は平成25年(2013)、第148回直木賞候補となる。

## Birdの色紙

京都府出身のシンガーソングライター。関西大学社会学部卒業。大学在学中は軽音楽部に所属。平成11年(1999)3月20日、シングル「SOULS」がデビュー。同年7月に発売したファーストアルバム「bird」は70万枚を売り上げ、日本ゴールドディスク大賞新人賞を獲得した。birdという名前は、デビュー当時のヘアースタイルが鳥の巣のようだったことと、小鳥のように歌声を響かせて欲しいことから名付けられた。

## 下小鶴 綾の色紙

女子サッカー選手。関西大学文学部在学中の平成15年(2003)に大邱ユニバーシアードで銀メダルを獲得。翌年、サッカー女子日本代表(なでしこジャパン)に選出され、アテネオリンピック予選・ベトナム戦(4月18日)で代表デビューした。平成17年(2005)、大学卒業とともに田崎真珠に就職、TASAKIペルーレFCに移籍する。平成20年(2008)に現役を引退するが、翌年復帰し、平成24年(2012)

から仙台ベガルタレディースで主将としてチームを牽引している。

## 梶川凜美の色紙

女子空手選手。平成22年(2010)、第54回全日本学生空手道選手権大会で優勝し、第52回大会からの3連覇を果たした。同年7月には第7回世界大学空手道選手権大会でも優勝し、世界選手権(2年に一度開催)連覇の偉業を達成している。

## 四 北村兼子関係資料の寄託と女子学生の歴史

関西大学の女子学生の歴史を振り返る場合、最初の女子学生である北村兼子の存在を抜きに語ることはできない。

北村は大正十二年(一九二三)十月、聴講生として本学に入学し、千里山で男子学生たちに混じって授業を受けたが、在学中から朝日新聞の記者としても活躍、女性の地位向上をめざしてハワイのホノルルで開かれた汎太平洋婦人会議や、ドイツのベルリンで開催された万国婦

人会議に日本代表として出席していることは、展示パネルの中でも紹介したとおりである。惜しくも昭和六年（一九三二）七月に二十七歳の短い生涯を閉じたが、立川の日本飛行学校でパイロットの資格も得ており、生きていれば同年八月に自ら飛行機を操縦してヨーロッパへと飛び立つはずであった。

このように、当時の活動的な女性の中でもずばぬけた存在である北村に関する資料二八五点が平成二十五年（二〇二三）九月、関係者から一括して年史編纂室に寄託された。女子学生の歴史に関する企画展を開催していることもあり、非常に良いタイミングであったと言えよう。

年史編纂室では、今後折にふれて北村関係資料を活用するとともに、学生の約四割が女子学生という現状を踏まえ、今後とも女子学生の歴史を学内外に紹介していきたいと考えている。

熊 博毅（くま ひろき・学術情報事務局次長）